田中友香理著『〈優勝劣敗〉と明治国家——加藤弘之の社会進化論』

小野寺　真人

[Article]
Masato Onodera
Yukari Tanaka, “Survival of the Fittest” and Meiji State: Social Darwinism by Hiroyuki Kato
(Received 18 September 2020)

A Noon of Liberal Arts, No. 12, 2024

はじめに——本書の構成について

本書は、日本近代思想史を専攻する新進気鋭の著者によるものであり、明治時代の啓蒙学者・加藤弘之の社会進化論がどのような国家観をその都度提起し、それが実際の国家権力とどのような関係であったかを論じる良書である。まず、本書の構成を紹介し、それに従いながら評してみたい。

本書は、以下のような章立てによって構成されている（節省略）。

序章　本書の課題と方法
第一章　国家思想の構築と社会進化論の受容
第二章　「優勝劣敗是天理矣」
　　——『人権新説』の思想世界における〈万物法〉——
第三章　明治二十年前後における〈優勝劣敗〉思想の深化
第四章　明治国家の確立と〈天則〉の主張
第五章　日清戦争前後の「道徳法律」論
第六章　日露戦後における社会進化論の行方
　　——〈自然〉一元論の提唱——
補章　加藤弘之による「追遠碑」建設
　　——大正二、三年の茨城県筑波郡訪問——
終章　本書の成果と残された課題

一覧してお分かりの通り、本書は、加藤の国家構想についてのさまざまな思索を通史的に描いている。社会進化論が時代によってどのような理論的影響を与えたかについては、松本三之介の『「利己」と他者のはざまで——近代日本における社会進化思想』[★1]が最新にして網羅的な研究である。松本の成果は、社会進化論が与えた影響範

囲を、単なる国家主義にのみとどめるのではなく、自由民権運動や初期社会主義といった国家主義に対抗する思想運動として通史的に描いた点にある。

それに対して、本書の力点はあくまで加藤の思索の変容とその中核とが、同時代の国家のありようといかなる緊張関係を切り結んだものであったかを明らかにすることに、論点の中心が定められている。

本書の達成点

序章で提示される論点は主に三つある。一つは国体論と〈優勝劣敗〉との関係であり、そのことを著者は「明治国家と社会進化論の緊張関係を紐解くこと」（一二〜三頁）と位置づける。第二の論点は、学者としての加藤弘之を「知識人の社会における役割」（一五頁）をどう果たしたのかを明らかにするということである。最後の論点は、近年の進化論研究の潮流に対して、「文化進化学をはじめとする新しい研究分野の進展に資してい」（一六頁）くものとして、本書の問題を構成している。

それらの論点を深めていくために、まず著者は、第一章にて幕末維新期の加藤の思想に着目する。中でも、「隣艸」や『真政大意』においては「立憲君主制と議会政治が統治のための「良術」」（三二頁）として位置づけられていた。そして『国体新論』では「後の天皇機関説に限りなく近いものであった」（四〇頁）と評する。

第二章では、加藤といえばこれ。と誰もが注目の目線を注がざるをえない『人権新説』がその中心主題を占める。『人権新説』の思想史的意義を強調する著者は、「進化論をはじめとする科学的視点や分析方法を取り入れることで…（中略）…宇宙、自然、そして人類社会を対象に、これらを貫く法則を探ること」（七八頁）であったと、著者は中立的な評価を行う。また『人権新説』を「ドイツの歴史学派の法学、経済学…（中略）…イギリスの社会学、人類学、民俗学、歴史法学等の人文科学からまなんだ科学的手法と歴史的事実に拠ることで…（中略）…〈優勝劣敗〉の思想を導き出した」と、引用元である西洋の学知の受容に即して、メタ的に論じている。特に、「王公政府」と「上等平民」という概念をめぐる加藤の思索が、加藤の著作各版の校合作業から明らかにする点は、真摯な一次史料の読解の痕跡が看取できる、本書の一つの白眉である。そして、その上で、明治十四年（政変）前後の君主と主権の所在をめぐる議論が展開される。しかし社会進化論受容後の加藤は「開化史」において、国家の成立から発展までを社会契約説や天賦人権説ではなく自然科学に起源を有する社会進化論によって説明したことが明らかにされている。つぎに『人権新説』の諸版の差異に着目し、「良性ナル優勝劣敗」と「邪悪ナル優勝劣敗」という概念が送付され、さらには「時勢ノ変遷」が付け加えられ、「統治と権利をめぐる〈優勝劣敗〉を時に抑止し時に調整するため」に「国家という存在がクロー

ズアップ」された、とする（一〇一～二頁）。そうした上で『人権新説』を「転向」という問題から遠ざけ、「立憲君主制を是とする国家思想をさらに補強するために〈優勝劣敗〉の進化思想を導入したもの」（一一四頁）と一旦結論づける。

第三章は、明治二十年代にそのステージを移す。一般的に「政治の季節」とされる当該期における社会進化論はいかなる深化を遂げていたのかがまず明らかにされ、さらに草稿「自由論」を具体的な素材として分析している。ここにも著者の丹念な史料調査と読解の痕跡がよく看取できる。そして、元老院の地方自治制度審議にも著者はその目を向けている。著者はこう結論づける。「治者と被治者の「自由」の進化は、三つの時代に分けることができ、治者、被治者という概念のない集団の時代、「最強者」が出現し強暴な「強者ノ権利」を発揮できる者が国家を創始し被治者を支配する時代、そして「強者ノ権利」を発揮できる者が被治者のなかから現れ、政権を担う時代」（一四九頁）として、三つの段階に分けていた、ということ、これである。その上で、「加藤は自治制を「人民ノ権利自由ヲ伸張スルノ法」」（一五〇頁）として加藤の地方自治制度論を積極的に意義づける。

明治国家の確立期と位置づけられる第四章は、明治憲法と進化論との関係性の問題がまず抽出される。そのうえで、加藤は創刊した雑誌『天則』を微に入り細に入り読み解き、万物の基本法則であった〈優勝劣敗〉論を、〈天則〉へと昇華させ、「無窮皇統」に統べられた「日本人種」がいかなる存在を占めるべきものであったのか、議論が鮮やかに展開される。具体的には、天則を「〝the law of nature〟〝das Naturgesetz〟を和訳したもの」とし、「自然、人間、社会すべてを包括する超越的概念」と位置づけ（一八一頁）、「統治権の本源であるところの「無窮皇統」を「国粋」として「保存」し続けることをも正当化する日本に特有の〈天則〉であった」（一八五頁）と結論づけている。

第五章は、日清戦争という具体的な「対外戦争」期の加藤の思索のありようが主題となり、加藤が「「国民」像／「臣民」像の形成という同時代の課題に…（中略）…「道徳法律」をもって対処しようとしていたのではないか」という著者の仮説に基づき、『強者の権利の競争』と『道徳法律之進歩』が具体的な検証素材となって、次のように結論づけられる。すなわち、「加藤によれば、日本の「道徳」は「忠君愛国」の一致した理想的なもの」であり、「天皇という「最大優者」と日本という国家を「維持進歩」させるために日本人の内面に刻み込まれた「道徳」とされた」（二〇五頁）のである。社会有機体説に基づいた「第三段階有機体」としての国家が、加藤の『道徳法律深化の理』の初版と増補改訂版にまで分け入って、その差異が明らかにされている。そこでは次のことが明らかにされる。すなわち、「「社会」が未開段階にあるとき、「社会を組成する所の要素」とは「権力」を把握する「治者と貴族」といった「優強階級」のみであ」るが、開化段階に至ると「「劣弱階級」も「知識」と「財産」を有し権力を把握する」のであり、「優劣の差が縮小すれば、「個人」は「利己心」を抑制し「社会の安寧幸福」という共通の目的を

もってひとつの「社会」を構成するよう要求する」（二二三～四頁）ものであった、ということである。

第六章は、日露戦争の後における社会進化論がどのように編成／変成されていくかが大きな注目点になっている。それは、西欧列強の一角を占める国家であるとされるロシアとの戦争勝利を経て、「一等国」として大日本帝国において、どのような進化論が編成／変成されていくのかを明らかにするものである。そこでまた〈優勝劣敗〉論が「復権」の契機を得て、「煩悶青年」と自然主義への批判がどのように展開されていたかが明らかにされる。そして、〈自然〉一元論と「国家の自治」へと加藤の社会進化論が帰結していく有様を活き活きと描写し、本書のこれまでの思索が端的に加藤の「〈自然〉一元論」を帰結したとする（二五一頁）。

補章は、本書の中の興味深い特異点を形成している。具体的には、「追遠碑」から加藤弘之の晩年の思考／志向を読み解こうとするもの、これである。加藤は晩年に「日本における「祖先崇拝」は、単に自身の先祖ではなく、とくに「皇祖皇宗」と「大功臣」に対するもの」（二八五頁）であったとされる。また「大正デモクラシー」前夜の加藤の思想をして著者は「加藤における国家の構成員像は、「族父統治」国家における、天皇の赤子とされる臣民としての側面を強めていった。「祖先崇拝」をとおして、天皇との擬似的な父子関係を再確認し、国家のために死ぬことも厭わぬ存在」（二八七頁）であったと結論づけられるのである。

終章では、「快楽」と「努力」という構成要素によって社会進化論のありようが論じられ、明治国家において社会進化論がどのような役割を果たしていたのかが明らかにされつつ、その成果と課題点について自己言及がなされ、本書は締めくくられる。成果については「加藤弘之における社会進化論に支えられた国家思想と現実の明治国家形成――確立――再編過程の連関を明らかにすること…（中略）…加藤の同時代における位置づけを見出すなかで、社会進化論に基づいた国家思想の思想的境位を明らかにすること…（中略）…近代日本において社会進化論によって国家を論じることの意味を明らかにするとともに、文化進化学といった新しい学問分野に対して一つのパターンを提示すること」（三〇四頁）とされる。

以上が、本書の大まかな内容であり、同時に達成点でもある。書評論文として評者に与えられた紙幅は極めて限定的なものであるので、ここからは本書に対する若干の稚拙な私見を述べて、フィナーレを迎えたい。

結語――加藤弘之思想の世界史的意義を明らかにするために

これまで叙述してきたように、本書は加藤の国家観と社会進化論の結合について、一次史料に基づいて真摯に議論してきた。その極めて実証的な思想史に評者は最大級の敬意を払いつつも、蛮勇を奮って何かをいうことが赦されるのであれば、次のようにいいたい。それは、同時に著者が「明治国家とは何であったか」、あるいは「世

界史において帝国日本という近代国家とは何だったのか」という大きな問いを「棚上げ」してしまうものであったということである。

そうであるがゆえにこそ、重要な視点を欠落させていることを、評者は厳しく指摘したい。

例えば加藤の社会進化論の中に内包されていた矛盾についてである。〈優勝劣敗〉論は、その時々の強者の正当性を担保するものではあれ、競争によって将来的に強者が劣者に「転落」する局面を無視することはできないものである。とくに、先進国である欧米列強と対抗するために、急速に近代国家を建設しなければならなかった日本にとっては、〈優勝劣敗〉論は、国際社会におけるヘゲモニーを掌握するにあたっての「希望の論理」ともなりうるし、また、アジアにおいていち早く「文明開化」した日本が、アジア諸国を「指導」の名の下に植民地化していく局面を説明できない。[★2] しかし、そうした矛盾のありようと弁証のされ方を著者はあくまで加藤の思索の変成の中からしか説明しておらず、どのようにして、天皇を中心とした中央集権国家が急速に要請されなければならなかったのかは、著者の議論では応答しようがないものと思われる。

評者からしてみれば、有賀長雄、丘浅次郎といった同時代の社会進化論者の思索を、加藤との対比材料としか登場させていないことにも、大きな不満が残る。例えば、有賀長雄を論ずるのであれば、いわゆる『宗教進化論』だけではなく、同じく「社会学」シリーズとして刊行された『族制進化論』についても触れなければ、当該期の言説空間のありようのなかでの加藤の立ち位置を明らかにするには、あまりにもアンフェアな議論であるといわざるをえない。具体的には、テーゼとしての加藤社会進化論は、早期に有賀社会学によって弁証されていたのである。[★3]

また、同じく社会進化論者であった丘浅次郎は、人類が自然から進化してきた種の一つであることを理由に、すなわち人獣同祖説からは、万世一系の天皇制批判など「神話に過ぎない」ことを揶揄しているのだが、[★4] そうした加藤の矛盾した論理の側面を著者はどのようにして弁証するのか、本書からはその点はまったく看取できなかった。

そもそも、近代的な主権国家が東アジアに成立した要因とは何か。それは西欧列強による植民地と市場の獲得競争という、帝国主義時代が世界史的条件として貫通した状況によるものである。

あるいは、加藤が思索を展開した時代状況からすれば、マルクス主義的な発展段階論や、それの影響を直接受けた社会主義思想（それ自体が社会進化論の影響を受けていることは前掲松本書が明白にしている）、更には、福沢諭吉が中心となって展開した文明史観との連関を無視するのはいかがなものであろうか。それらとてまた「明治国家」と「帝国日本」の大きな部分の構成要素であったことに間違いはない。そうした時代状況にアダプトするための国家主義という位置づけなくして、明治国家を問うこと、あるいは帝国日本を問うことに対して、あまりにも議論の脆弱性を呈しているといわざるを得まい。本書は明治国家という主権国家の成立と二つの対外戦争という世界史の歯車に隣接しながらも、それに噛み合うための歯だ

けを備えつつ、回転軸としての車輪を用意するには至っていないのである。逆にいえば、そうした点を進化／深化させることによってこそ、本書ははじめて世界史に開かれていくのである。

とはいえ、加藤弘之の国家思想と社会進化論とを連結させた本書は、政治学書としても政治思想史書としても歴史書としても類例を見ない良書であることには間違いない。本書の成果がこれからの論理の進展のための大きな土台になること、これは強調してしすぎることはないだろう。

以上、手前味噌な引用と、勝手かつ暴力的に過ぎる評論を繰り返し述べてしまったが、そのことの全責任は評者が受け持たなければならない。評者の浅学非才な論評が本書の魅力を一切損耗させることがないように祈念し、一旦ここに筆を措くこととしよう。

『〈優勝劣敗〉と明治国家　加藤弘之の社会進化論』（ぺりかん社、二〇一九年、六八〇〇円＋税）

註

★1 以文社、二〇〇七年。

★2 このことに関しては、拙稿「二つのダーウィニズム、二つのアジア観――明治一〇年代の言説空間のアポリアとエクソダス――」、『洛北史学』第九号、二〇〇七年によって微細に論じているので、そちらを適宜参照してもらいたい。

★3 前掲拙稿三六～九頁でこの問題について具体的に論証している。

★4 この問題に関しては、右田裕規「天皇制と進化論――近代日本の統治機構による進化論への対応の変遷」、『歴史学研究』七九二号、二〇〇四年が詳細に論じている。

おのでら・まさと（日本近現代史・思想史）